

Mandolin & Guitar Ensemble Bel Cuore

ベル・クオーレ

マンドリンコンサート No.36



日時／2018年5月12日(土) 開演 PM2:00(開場 PM1:30)

場所／浜離宮朝日ホール

主催 ベル・クオーレ



ご挨拶



本日はご多忙の中「ベル・クオーレ」の定期演奏会に足をお運びいただき、ありがとうございます。無事第36回の定期演奏会を迎えることができたのも、ひとえに私たちの音楽活動を暖かく見守り、ご支援いただいている皆様のお陰です。

今回もここ浜離宮朝日ホールで演奏できることに、団員一同喜びを噛みしめております。マンドリンやギターの繊細な音色を豊かに響かせるこのホールでの響きを念頭に、音楽づくりを重ねてまいりました。毎回ご来場くださる皆様にも、なじみの場所となってきたのではないのでしょうか。

今回のプログラムにつきましては、近年演奏した曲の再演を中心に、皆様にも馴染みやすい曲を取り揃えました。

まず前半は、北欧の作曲家シベリウスから「アンダンテ・フェスティーヴォ」と「悲しきワルツ」。前者は祝祭のイメージ、片や闇の訪れのイメージ。正反対な雰囲気との2曲です。

ロシアの作曲家チャイコフスキーからは、ロシア民謡を元にしたとされる「アンダンテ・カンタービレ」を。優雅な中にも表情の変化に富む、歌心が求められる曲です。

後半はイギリスの作曲家の曲を集めました。

まずはイギリス民謡の旋律を軸にしたヴォーン・ウィリアムズの「グリーンズリーブスによる幻想曲」。

続いて「春初めてのカッコウの声を聴いて」。カッコウの鳴き声をモチーフにした、ディーリアス独自の哀愁漂う世界が現れます。

最後はエルガーから「弦楽のためのセレナーデ」。当団体では2009年以來の再演となります。3楽章からなるシンプルな構成ながら、若々しい表現に溢れた曲となっています。

私たちは、今期の活動において「アンサンブルの意識を大事にすること」をテーマとしました。演奏の際ともすれば自分の担当する音にだけ集中しがちですが、そこから脱し、全員が曲全体を共有し表現できるようにを心がけました。


再演含め馴染みのある曲であるからこそ、アンサンブルに集中することでさらに一段上の表現に至れるのではないかと考え、曲の捉え方、練習の進め方から見直し、日々努力を続けてまいりました。

本日の演奏会ではその成果を存分に発揮し、活き活きとした演奏を皆様にお届けしたいと思っております。


最後までお付き合いいただきます様、よろしく願いいたします。

ベル・クオーレ団員一同

ベル・クオーレでは演奏メンバーの募集を行なっております。
マンドリン合奏への参加をご希望の方は、井上 (03-3712-3819)
または bel.cuore.mail@gmail.comまでご連絡下さい。



プログラム



アンダンテ・フェスティーヴォ…………… J. Sibelius
編曲 / 佐藤 洋志

悲しきワルツ…………… J. Sibelius
編曲 / 佐藤 洋志

弦楽四重奏曲第1番ニ長調 作品11より

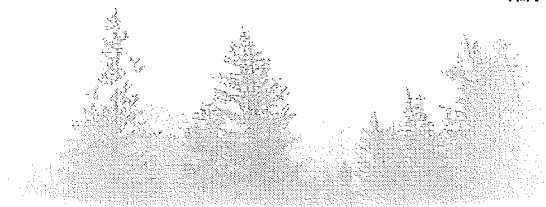
アンダンテ・カンタービレ…………… P. I. Tchaikowsky
編曲 / 進藤 知哉

————— · 休 憩 · —————

グリーンスリーブスによる幻想曲…………… R. Vaughan Williams
編曲 / 佐藤 洋志

春初めてのカッコウの声を聴いて…………… J. Delius
編曲 / 佐藤 洋志

弦楽のためのセレナーデ…………… E. Elgar
編曲 / 進藤 知哉



アンダンテ・フェスティーヴォ J.Sibelius 編曲／佐藤 洋志

シベリウス(1865-1957)はフィンランドの国民的英雄となった作曲家で、有名な交響詩「フィンランディア」や交響曲第2番のみならず、北欧の豊かな自然の情景や神話の世界、また自身の内省的な世界観が反映された幾多の傑作が多くの愛好家に支持されています。

この「アンダンテ・フェスティーヴォ」は、1922年にサイナトゥサロ製作所25周年記念祝賀会のために弦楽四重奏曲として作曲されました。

1930年には作曲家自身により、コントラバスとティンパニを含む弦楽合奏用に編曲されています。

フェスティーヴォはイタリア語で「祝祭的な」という意味ですが、アーメン終止で荘重に曲が締めくくられ、宗教的な祈りを感じさせる曲想となっています。

悲しきワルツ J.Sibelius 編曲／佐藤 洋志

シベリウスは、義兄である劇作家のアルヴィド・ヤルネフェルトの書いた戯曲「クオレマ(死)」のために劇付随音楽を作曲しました。

「クオレマ」は1903年12月にヘルシンキにて上演されましたが、シベリウスは翌1904年にその劇付随音楽の中の一曲に手を加え、「悲しきワルツ」と題し独立した作品として発表しました。

この曲は発表されるとたちどころに人気作となり、シベリウスの代表曲の一つとなりました。今日では、オーケストラのアンコールピースとしても良く演奏されます。

「悲しきワルツ」では、以下の情景が語られます。『死期が迫った病床の母が、夢うつつにワルツの調べを聴き、やがて起き上がり幻の客と一緒に踊り出す。

頂点に達すると戸を叩く音によってワルツは中断され、踊っていた客も消え、戸口には死の影が立っている。』

アンダンテ・カンタービレ P.I.Tschaikowsky 編曲／進藤知哉

ロシアの後期ロマン派を代表する作曲家のピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)は、3大バレエ(白鳥の湖、眠れる森の美女、くるみ割り人形)、交響曲第6番「悲愴」をはじめ、ピアノ協奏曲第1番やヴァイオリン協奏曲など、数多くの著名な作品がありますが、この「アンダンテ・カンタービレ」もそのひとつです。

チャイコフスキーは、1866年にニコライ・ルビンシテインの要請を受け、ルビンシテインの創設したモスクワ音楽院の教師に赴任しました。その後、ルビンシテインはチャイコ

フスキーに、自作によるコンサートの開催を勧めました。経費その他も配慮して小ホールでの演奏会になりましたが、それに向けたプログラムを組むのに曲数が足りなかったので、急遽「弦楽四重奏曲第1番」が1871年に作曲されました。

「アンダンテ・カンタービレ」は、この「弦楽四重奏曲第1番」の第2楽章で、単独でもしばしば取り上げられます。この曲の第1主題は、チャイコフスキーはかつてウクライナの村に滞在したときに、村のペチカ(ロシア式の暖炉)造り職人が仕事をしながら歌っている民謡から着想したといわれており、曲全体もロシアの民俗的で穏やかな響きに彩られています。

グリーンスリーブスによる幻想曲 R.V.Williams 編曲／佐藤洋志

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872-1958)(以下、RVW)はイギリスの作曲家で、作曲家としては遅咲きであり、最初の歌曲を出版したときには30歳になっていました。

民謡の採集や教会音楽の研究を通して独特の作風を確立し、イギリス人による音楽の復興の礎を築きました。イギリスの田園風景を彷彿とさせる牧歌的な作風は、広くイギリス国民に愛されています。

RVWは1904年、イングランドの各地方に根付いていた民謡やキャロルが、地方での識字率向上や印刷楽譜の普及に伴って口頭伝承の影が薄くなっているために、急速に失われつつあることを見出しました。

自ら田舎を訪ねて歩き、多くの曲を編曲して保存しながら、そういった音楽の美しさや普通の人々の日常の中で培われた名もない歴史に魅了され、自作の楽曲に歌曲や旋律の一部を取り入れています。

本日演奏する「グリーンスリーブスによる幻想曲」は、RVWが1928年に完成した歌劇『恋するサー・ジョン』の中で使われている2つの民謡をもとに、作曲家ラルフ・グリーブズが編曲・独立させたといわれている作品で、1934年にRVW自身の指揮により初演されました。曲全体としてはABA形式となっており、Aは伝統的なイングランドの民謡として有名な「グリーンスリーブス」がもとになっています。

中間部であるBの旋律は、RVWがノーフォークで採集した民謡「美しきジョーン」がもとになっています。

春初めてのカッコウの声を聴いて F.Delius 編曲／佐藤洋志

フレデリック・ディーリアス(1862-1934)はイギリス生まれの作曲家です。元々ヴァイオリンやピアノを嗜んでいたディーリアスですが、音楽の道に進むことを反対していた

資産家の父の意向で、オレンジ栽培のためにアメリカフロリダ州に送られます。そこで出会った黒人音楽に感化され、作曲を始めます。ドイツにて正式な音楽教育を受けたのち、パリにて職業作曲家としての人生を全うします。

グリーグと交友を持ち、ワーグナーの熱心な信奉者となったディーリアスですが、その影響から抜け、彼独自の様式美が開花した20世紀初頭頃から世に認められる様になります。

本日演奏する「春初めてのカッコウの声を聴いて」は、ちょうど彼の作曲活動の円熟期ともいえる1912年の作品です。

冒頭の短い序奏、霧の中からかすかに聴こえ始めたカッコウの鳴き声は第1主題として引き継がれます。

高らかに歌われる第2主題は、グリーグのピアノ作品Op.66 No.14でも取り上げられたノルウェー民謡「オーラの谷間で」を元にしています。その後カッコウの鳴き声そのものが繰り返し模倣されつつ、モチーフも微妙に変化しながら繰り返されます。

どの旋律も、カッコウの鳴き声に由来する下行音形を軸とした哀愁漂うものですが、その裏には春の訪れへの喜びだけでなく、春が去ることへの名残惜しい思いすら感じさせます。

弦楽のためのセレナーデ

E.Elgar 編曲／進藤知哉

イギリスを代表する作曲家の一人であるエルガー（1857-1934）は、「威風堂々」をはじめとする行進曲や、交響曲等の作品が有名で、これらは国威発揚的、都会的で洗練されたイメージを持っています。その一方で、彼が生まれ育ったイングランド中部ウスターの豊かな自然に触発されて作曲された「愛の挨拶」「序奏とアレグロ」「エニグマ変奏曲」等の作品も良く知られています。

「弦楽のためのセレナーデ」は後者に属する曲で、エルガーからキャロライン夫人への結婚記念日の贈り物として1892年に作曲されました。なお公式には友人であるW.H. ウインフィールド氏に献呈されています。

3つの楽章に分かれますが、曲全体を通して牧歌的で穏やかな雰囲気が漂っています。第1楽章はアレグロ・ピアチェヴォーレ、6/8拍子のシチリアーノのリズムに乗って軽快ながらどこか渋みも感じさせる旋律が歌われます。第2楽章はラルゲット、穏やかな安らぎに包まれる中で時折見せる音の跳躍など、和声の動きに目新しさを感じさせる緩徐楽章となっています。第3楽章のアレグレットでは伸びやかに田園風の気分が歌われた後、第1楽章の動機が回帰して曲を締めくくります。

この曲は、過去にも何回か取り上げています（第7回、第15回、第20回、第27回）。今回はどんな演奏になるのでしょうか、ご注目ください。

指揮者



小出 雄聖

大阪に生まれ、4歳よりピアノ、5歳よりヴァイオリンを始め、相愛学園子供のための音楽教室にて斎藤秀雄氏のもと同オーケストラコンサートマスターを務める。演奏家を目指して東京芸術大学付属高校を経て同大学を卒業するが、手の故障を契機に指揮活動を始め、セルジュ・チェリビダッケ氏のセッション、タングルウッドのサマーセッションにて研修、とくにチェリビダッケ氏からは多大な影響を受ける。

1996年に渡米し、マイケル・チャーリ氏のアシスタントを皮切りに、ボストン・ムジカ・ヴィヴァ、マネス・オーケストラ、ニューアムステルダム・シンフォニーを振る。翌年ニューヨーク・フィルハーモニック主催のマスタークラスにて指揮したシューマン、ブラームスをクルト・マズア氏が絶賛、「的確で創造性に富む指揮」と評され同氏アシスタントの一方、フィリップ・アントルモン氏の信頼を得て世界のオーケストラの指揮台に立つことになる。

アメリカではシンフォニエッタ・サファイヤ(1997~98シーズンから2000~01シーズンまで常任指揮者)をはじめ多数を指揮、またカリブ海のサント・ドミンゴ音楽祭にも招かれる。2001年よりヨーロッパへも活躍の場を広げ、オルケストラ・プロヴィンスィア・ディ・バーリ(イタリア)、ユトレヒト・カメロルケスト(オランダ)、フィラルモニカ・ブラショフ、フィラルモニカ・オルテニア、フィラルモニカ・プロイエシュティ、フィラルモニカ・トゥルグムレシュ、フィラルモニカ・タルゴヴィシュテ、フィラルモニカ・ラムニク・ヴァルチャ、フィラルモニカ・サトゥマーレ、フィラルモニカ・スイビウ(以上ルーマニア)に登場。

「雄聖! その精緻で深い音楽!」と賞され、ノウア・オーケストラ・トラスィルヴァーナ常任客演指揮者兼アーティスティックアドバイザーに任命され(2006~07シーズンより)、それを機にヨーロッパでのさらなる活躍が期待されている。

日本では京都市交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、東京交響楽団、東京シティフィルハーモニック管弦楽団、広島交響楽団、群馬交響楽団を指揮。指揮法をエルヴィン・ボルン、カール・ピュンテ、久山恵子、山田一雄、マイケル・チャーリの各氏に、和声法・対位法を國越健司、池内友次郎、ロバート・クックソン、楽曲分析をカール・シャクター、作曲をディビッド・ローブの各氏に師事。

